

'77. 2. 4

Paris Biennale
A

SHIPPING, Japan

福田総理に現代芸術で望む

いま東京・池袋の西武美術館で開催中のフンデルトワッサー展（前号本欄参照）は、七五年にオーストリア政府が組織した「オーストリアはフンデルトワッサーを世界に贈ります」世界巡回展の一環である。中欧の一小国が自国の誇るべき現代美術を世界に紹介しているのだ。これにひきくらべ、わが国は何とおそまつなことだろう。棟方志功や芹沢銈介、近くは平山郁夫の個展が海外で開かれており、かれらの仕事も日本の風土から生まれたものにちがいないが、それを紹介するだけでは、片手落ちというものである。

伝統的な仕事も大切だが、やはり現代芸術がその国の文化を先鋭にあらわしているのだ。にもかかわらず、政府やそれにつらなる機関は、現代芸術を海外へ広めるのに、ほとんど非力だ。わずかに通産省系列によるJAF Aがあるが、専門家や参加作家たちのあいだで出発当初から体質改善が望まれている。

そもそも現代芸術への理解に乏しいのだ。たとえば、世界に誇っている音楽家の武満徹が、かつてベルリンでかバリだかで作品を発表した際、現地の主催者筋が日本の大使館

に協力を要請したところ、館員は、そんな人は知らないと言げなく断ったという。また、天皇・皇后が渡欧した七一年、パリ青年ビエンナーレに参加するため現地に赴いた作家たちは、あらかじめ政府筋から瑣末な用事で大使館を訪れぬようクギをさされた。どうやら作家たちはヒッピーか過激分子の扱いをされたようだ。

唯一つ頼りになるのは、文化庁と国際交流基金ということになりそうだ。福田総理は、田中内閣の蔵相時代に、経済大国は文化大国にもなるべきだと先見の明を発揮して、余分のドルをもとに国際交流基金を誕生させた。一国の政策に国民生活の安定ということを欠かすわけにいかないが、わたしたちの生活が物価の安定だけでは満たされず、文化面での拡充が必要だという事実を理解することから始まって、自動車や電気製品品の輸出のみならず、生きた現代芸術の輸出をも促進することにまで発展してゆくわけにいかないのだろうか。

国際交流基金の設立はフロックだとは思いたくない。改めて総理に現代芸術への理解と、それを世界的な規模で示す英断とを望みたい。（丘）

